

## 「P2M に期待すること」

東京農工大学 学長 千葉一裕

世界が経験したコロナ禍は「ポスト・コロナ時代」という、これまで想定もしなかった次の新しい世の中へ向けた動きを導きだしている。この感染症によって被ったものは甚大であるが、そこから新たな秩序へ向けて、これまでとは違った社会を創り出そうとすることは、次への一歩に向けた必然的な挑戦である。この大きな変化の中でさらにはっきりしてきたことは、これまでの経済的な価値観を中心とする社会は、自然や人を中心とした新たな価値観に基づく社会へと急速に変化し、効率主義やモノとしての評価軸から、しなやかで強靱な社会の構築や持続的な快適さ、生きがいなど、人としての評価軸を重視する形へと舵が切られるということである。これを実効性のある形で着実に進めるためには、科学技術と社会科学が相互に連携した新しい概念によるイノベーションが必須である。

イノベーションの重要性はこれまでも長く唱えられてきた。しかしそれは、過去の成功事例としてはよく理解されるものの、いざこれから何をどのように目指したら良いのかという議論が始まると、実はイノベーションそのものについての定義も進め方も組織や人によってそれぞれ異なっているため、多様な価値観が混交する中で、日々活動はできても実質的には足踏みをしてしまうことが多い。最も陥りやすいことは、自分が関わる優れたシーズや発明を発展させるスキームにおいて、必ずそれを基盤にしたい、あるいは基盤にすればありがたい姿が実現できるはずという発想だけに固執してしまうことである。これはそれに関わる研究者や技術者の立場においては当然のことかもしれないが、多くの場合すぐに大きな障害にぶつかる。初期の段階では、その提案の独創性や未来へ

の期待から一定の資金や人材も投下されるが、その後大きな市場や社会にしっかりと新たに生み出された価値を定着させるには、より大きな波及力となることの確証や出口志向の研究開発、事業開発が必要となる。そのためには、当初想定していたスキームやそれを構成するプロジェクトの計画的な発展だけでは不十分となり、大きなシステムとしての柔軟性のある再構築とゴールとの繋がりを示すことができる明確なストーリーの再生が必要となる。そして何よりも大事なことは、この流れを責任と信念をもって推進する人たちによるチームの存在だろう。この一連の流れは、飛び抜けた発想力というより、戦略を含めた一定レベルのスキルによるところが大きい。また、チーム内やチーム間の信頼関係・協力関係の構築が、しっかりした持続性を獲得する上で最も大切なものになる。

P2M は、このような理念や方法論を明確化しているものだと思う。特に、イノベーションがスキルやチーム力に依存するという考え方は、日本がこれまで培ってきた文化や価値観、あるいは明確な課題に対する勤勉な取り組み姿勢というものが実効性をもって発揮されることに繋がるのではないだろうか。今、地球全体のあり方を視点に新たな事業価値、社会価値を生み出すスキームに大きな期待が寄せられている。地球の限られた空間や資源を、世界中の人々が知恵を出し合い、うまく分かち合いながら一定レベルの満足感を得るという、日本が大切にしてきた考え方に光が当たっている。P2M が提唱することを広く国際社会に示し、先導することによって、新たな手法に基づくイノベーションを実証していくことが何よりも大きな説得力になるだろう。

(2020年11月27日受理)